

特集趣旨

渡辺 克典
(徳島大学)

本特集は2019年9月28日(土)に立命館大学朱雀キャンパスで開催された生存をめぐる制度編成研究プロジェクト企画『日本気象行政史の研究』合評会をもとに編まれている。この合評会は、以下のような趣旨でおこなわれた(以下、所属等は開催当時)。

若林悠氏(東京大学先端科学技術研究センター特任助教)は、著書『日本気象行政史の研究——天気予報における官僚制と社会』(東京大学出版会、2019年)において、日本の気象行政の歴史的変遷を明らかにした。同書は、天気予報に対する「評判」と行政組織内外での価値の制度化に着目し、科学技術をめぐる行政と社会との相互作用を解き明かすものである。

若林氏の著書を手掛かりに、科学技術への「信頼」と「評判」、行政組織と民間および消費者との連動などについて考える契機としたい。

まず簡単に、生存をめぐる制度編成研究プロジェクトについて説明しておきたい。このプロジェクトは2018年度にはじまり、『立命館大学生存学研究』第2号で特集「制度編成とアーカイヴィング・メソッド」を組んでいる。プロジェクトの目的や方針は、同特集の解題を参照いただきたい。これに引き続く2019年度に生存学研究所による研究プロジェクトとして採択され、活動を継続している。

2019年度の活動は、院生による調査研究等に加えて、制度に関する専門書の精読をすすめた。新メンバーをまじえた読書会では、瀧澤和弘『現代経済学』(中央公論新社、2018年)、筒井淳也『制度と再帰性の社会学』(ハーベスト社、2006年)、フランチェスコ・グアラ『制度とは何か』(瀧澤弘和監訳、慶應義塾大学出版会、2018年)といった網羅的、理論的な書籍を読みすすめていたが、それとともに、具体的な制度分析をおこなっている専門書の読書会をすすめたいという要望もあった。いくつかの書籍を検討したのち、2019年3月に刊行された『日本気

象行政史の研究』が第一候補となった。これらの選定をすすめるうえで、著者との直接的な質疑応答への希望もあり、(まったく面識がなかったにもかかわらず)招聘がかない合評会の開催にいたった。

以上のような過程を経て9月の合評会は開催された。合評会のプログラムは以下のとおりである。

自著解題：若林悠(東京大学先端科学技術研究センター)

評者コメント：川端美季(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

院生指定質問：伊東香純(日本学術振興会特別研究員DC/立命館大学大学院先端総合学術研究科)、塩野麻子(立命館大学大学院先端総合学術研究科)、平安名萌恵(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

応答とディスカッション

司会：渡辺克典(立命館大学衣笠総合研究機構)

本特集は、合評会での指定質問や応答・ディスカッションを踏まえた伊東氏、塩野氏、平安名氏による論考、これら3つの論考への若林氏による応答、そして川端氏による書評論考を掲載している。

次に、本書の合評会特集を生存学研究所の紀要に掲載する意義について述べておきたい。第1に、本書は「気象」という自然現象に対する行政機関の研究となっている。生存学は2007年にグローバルCOEプログラム(国際的に卓越した教育研究拠点形成のための重点的支援)において<学際、複合、新領域>分野での採択をうけた活動である。本書は自然現象への社会的な取り組みを分析する研究成果でもあり、学際的あるいは複合的な視野をもつ研究成果であった。合評会の意図の1つは、理論的な制度分析を学際的あるいは複合的に考究した研究から学ぶ点にあった。

第2に、東日本大震災や昨今の自然災害にみられるような気象現象と生存の関係がある。本書は、日常的な生

活や災害時の生存にかかわる気象を専門とする行政機関の歴史研究や制度編成研究であるとともに、気象にかかわる科学技術と気象行政の分析でもある。さらにいえば、本書では歴史的な側面とオーラル・ヒストリーによるアプローチがおこなわれている。こういった研究視野は、生存学が掲げる「障老病異」といった点からは遠いようにみえるが、アプローチとしての①生存の現代史、②生存のエスノグラフィー、③生存をめぐる制度・政策、④生存をめぐる科学・技術にとって学ぶ意義のある研究成果であると考えられた。

第3に、本書が博士論文をもとにした専門書であることをあげることができる。生存学研究所研究プロジェクトでは「若手研究者研究強化」が明示されており、大学院生による参加を必須としている。3名の院生による論考は研究会での精読や草稿検討を経たものであり、合評会の開催や本特集を組むことそれ自体の意義も大きかった。それに加えて、合評会では（本特集にはふくんでいないが）博士論文執筆についての報告もあり、大学院生たちが博士論文、そしてそののちにも研究を実践していくことを学び取る場にもなった。

以上、簡単に3つの意義をあげてみたが、もちろん、その他の点でも本書の視野を生存学の研究課題と関連づけることは可能だろう。たとえば、障害や病いにかかわる厚生労働省と気象行政の歴史過程に関する比較、あるいは、ケアや医療といった専門職と気象行政にかかわる技官の相違を考察することもできるかもしれない。本特集がこれからの生存学研究につながっていけばなによりである。

最後に、合評会ならびに本特集は研究プロジェクトメンバーや研究所事務局などのご尽力によって成り立っている。研究プロジェクト代表者として、この場を借りて御礼申し上げたい。就中、全面的な協力をいただいた若林悠氏の誠意とご助力に厚い感謝を記したい。